

色彩豊かな葉色の变化に魅せられて II

～私の思い出の色葉植物～

—カラーリーフプランツ—

横井政人

昨年号には私の約40年間の葉色変異種や品種の収集暦をまとめた。今回は収集中に見つかったり話題になった色葉植物(斑入り植物を含めたカラーリーフプランツ)について述べてみよう。

どの分野でも、コレクターは珍しいもの、見たこともないものに興奮し手に入れたいと思う。私自身も、初めてみる種類や品種、江戸時代にあった植物の再出現、前々から希望していた種類・品種が思いがけずに目の前に現れると、エキサイトすることがしばしばあった。

ここでは、私を魅了して止まない色葉植物の種類や品種をできるだけ多く挙げてみよう。

取り上げた種類・品種は国内・国外の1)黄金葉、2)銅葉、3)銀葉、4)斑入り葉、5)その他、トリカラー(五色葉)で、この順にまとめてみる。

1) 黄金葉

トチノキ黄金葉

Aesculus turbinata (トチノキ科)

栃木で入手。本個体は明るい黄色で初夏は最高。イギリスにもセイヨウトチノキの似たような黄金葉品を見たが、日本では日焼けに弱い。



ベゴニア・サザーランドリア 'オーレア'

Begonia sutherlandii 'Aurea' (シユウカイドウ科)



タンザニア原産という小型のかわいいベゴニア。花はオレンジ色で5～10月に開花。30cmまでになるベゴニア仲間であんなにきれ

いな黄金葉品種はないと思う。真夏も日陰に置けば日焼けはなく、涼しい葉色。広がるタイプ。タキイ種苗発売。

カシワバアジサイ'リトル・ハニー'

Hydrangea quercifolia 'Little Honey' (アジサイ科)



大形のカシワのような葉型で、花穂が大きいので人気がある。最近英国のキャッツ氏発見の黄金葉は春から夏の黄色がすばらしい。

やや小型。日本ではまだ普及していない。半日陰のほうが葉色はきれいなようだ。

ギボウシ'サム・アンド・サブスタンス'

Hosta 'Sum and Substance' (ユリ科)

ギボウシのなかで最大黄金葉。葉は長さ90cm、幅40cmにもなる。花色はうすい白紫色。広いスペースが必要だが豪華。



ルス'タイガース・アイ'

Rhus typhina 'Tiger's Eye' (ウルシ科)



米国原産の大形落葉樹でウルシの仲間であるが本種はかぶれない。細く切れた葉の真夏の芽えた黄金葉は特に見事。数年前から外国では販売されている。自根で広がる。

2) 銅葉

ウリハダカエデ‘黒古光紅’

Acer rufinerve ‘Kuro kogo beni’ (カエデ科)

矢野氏が奈良の道端で発見した。一見葉が真っ黒に見え驚く。こんな葉色はカエデでは見たことはない。時期によっては紅色のようである。販売はまだない。国分氏の分析によると黒い色素がなく紅色色素のシアニジンであった。葉の黒色はおそらく緑色の葉緑素が関与していると思う。

ネムノギ‘サマー・チョコレート’

Albizia julibrissin ‘Summer Chocolate’ (マメ科)

18年前サカタのタネからいただいた。当時、会社は植木には興味がないのであげるといわれ、ネムノギにこんな葉色が出たのかと私自



身は大喜びだった。現在では普及してカラーリーフ小鉢で売られるようになった。米国の特許をとるとき故岩佐吉純氏に許可をもらいに行ったことを思い出す。現在、もっと濃い葉色品種が出ているという。

ダリア黒葉‘ビショップ・ランダフ’

Dahlia ‘Bishop of Llandaff’ (キク科)



1928年にウイズリーのコンクールに出品、以後現在でも生産・販売されている長寿品種。日本でも最近わずかに植えられている。5~6年前英国で入手した。国分氏の分析によると上記のウリハダカエデの葉に含まれる色素と同じシアニジンで、黒

色になるアントシアニンではなかった。

矮性セイヨウブナ

Fagus sylvatica ‘Purpurea Nana’ (ブナ科)



巨木になる種類であるが本品種は20年たっても人の背ぐらいで、地味ではあるが狭い庭にはよい。最後は3mにはなるといふ。日本ではまだ生産がない。

3) 銀葉

アルテミシア

Artemisia mauriensis (キク科)

常緑低木のヨモギ。日本には木になるヨモギはないのでおもしろい。ハワイのギンケンソウが生える地帯に見られる。細かい銀色の葉をつける上品なヨモギで私の好きな植物のひとつ。ハワイの武田氏から12~13年前に枝をいただき保存している。高地にあるので耐寒性があると思ったが、意外に霜に弱いので冬は加温が必要。夏は涼しげでよい。



4) 斑入り

ラセイタソウ

Boehmeria biloba (イラクサ科)

太平洋側海岸自生の葉の厚い宿根草。まれに庭植えする。斑入りはまだ珍しい。

カンスゲ類 カレックス‘スパークラー’

Carex ‘Sparkler’ (スゲ科)

永井万作氏よりいただき、テンジクスゲの品種であると横井・広瀬が1998年に発表。インガー氏が品種名を‘スパークラー、花火’と命名した。今はかなり普及した。またカレックス‘シルヴァー・セプター’*Carex* ‘Silver Sceptre’は私の庭の突然変異品とダーク氏が同定し(2007)、英国人が命名。まだ普及していない。白覆輪でグラウンド・カバーにより小形品種。

ハンカチノキ‘綾錦’

Davidia involucrate ‘Aya-nishiki’ (ヌマミズキ科)

柴道明氏が中国より導入した株の中にいろいろのタイプの斑入り個体があり、特に印象的な刷毛込み品を選抜・育成した。覆輪、中斑、散り斑など多彩。

ウワバミソウ(ミズナ)白覆輪

Elatostema umbatum (イラクサ科)

日本、中国の山中湿地に自生する普通の宿根草。野性味があつてよい。散り斑、黄金葉品もある。

ショウジョウソウ

Euphorbia cyathophora ‘Yokoi’s White’ (トウダイグサ科)



ポインセチアのような赤色の苞がでる宿根草。メキシコには多く自生する。この白覆輪斑入りは私が沖縄で雑草として捨てられていたのを1989年に発見、あまりのすばらしさに驚嘆したものである。安藤正彦氏の著書「使ってみようガーデンプランツ」(グリーン情報2006)に紹介された。しかし寒さに弱いので維持が難しく、最近は生産・販売がなくなった。八丈島にも黄覆輪品が出たが今はない。米国特許品。

ギボウシ‘クレープ・スゼット’

Hosta ‘Crepe Suzette’ (ユリ科)



ふつうギボウシは株元の芽が殖えて大きくなるが、この品種は根がヨモギ状に伸び、1株植えると1m幅にいつのまにか広がっている。変わった小型の品種で好ましい。

イヌツゲ‘スカイペンシル黄斑入り’

Ilex crenata ‘Skypencil Variegated’

私が安行売店で数年前に発見。刷毛込みや覆輪斑など出て不安定であるが、ほうき立ちの樹形がおもしろいので大株になれば印象的な木になると思う。

モミジ(バ)ヒルガオ

Ipomoea cairica (ヒルガオ科)

白黄覆輪品、本当に驚きの完全覆輪。熱帯の多年性雑草であるが覆輪葉は見事。アモイ島で桑島氏の発見。販売はない。なぜか挿木や接木し



ても活着しないのでまだ殖えない。暖地では越冬。かってヒルガオ科のルコウソウにも上品な覆輪葉品が発生したが惜しいことに一年草のため保存できなかった。

ジャカラнда‘エレガント・ショー’

Jacaranda mimosifolia ‘Elegant Show’

(ノウゼンカズラ科)

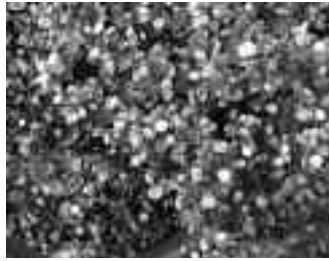


花が青く上品な花木。ネムノキの葉のような長さ5mmの細かい葉をよく見ると完全な覆輪で信じられないほどすばらしい。行徳氏発見。刷毛込み斑品種‘サマー・サンバ’もある。寒がるのが欠点。

ワイヤプランツ‘スポットライト’

Muhlenbeckia axillaries f. variegata ‘Spot Light’(タデ科)

10年ほど前、ロンドンから遠い園芸店でこの斑入りがハンギング・バスケットに使われているのを見て驚き、欲しかったが分けてもらえなかった。それが昨年からは日本で買えるようになった。派手な斑入りではないがおもしろい。常緑小低木。



バジル‘ディープアロマ’

Ocimum basilicum (シソ科)

代表的なハーブ、バジルに白覆輪葉品種が発現した。ハルデインの新発売。葉が美しく、香りが良く、食用にもなる斑入り品種はすばらしい。

ラヴェニア黄覆輪

Ravenia spectabilis (アカネ科)



キューバ原産の明るい濃ピンク色の花が親しみのある常緑低木で、熱帯の花にしては、くどくない花色。濃い黄覆輪葉も明るく強健、鉢植えに向くと思う。まだ販売がないよう。タイから持参。

ムクロジ刷毛込み斑

Sapindus mukurossi (ムクロジ科)



落葉・羽状複葉高木。DNAの研究からカエデと類縁であるということにより、今カエデ科をムクロジ科に代えるという話題をまいている。この植物にも刷毛込み斑入りが最近見つかった。

ダイキンギク

Senecio scandens (キク科)

日本暖地からアジア海岸に自生する宿根草。この華やかな斑入りは中国人より購入。一年中、印象的な白、クリーム、紫紅色の刷毛込み葉を出しながら伸び、ややつる性になる。花は濃い黄色で秋遅くから春早くまで咲き、花の少ないときによいものである。埼玉南部では無加温で越冬。

サルトリイバラ

Smilax (サルトリイバラ科)



中国産で大形。今までにない新芽が真っ白に出て、のちピンクがかかる派手な品種。耐寒性。販売はまだない。

ハスノハカズラ

Stephania japonica (ツツラフジ科)

海岸に生える常緑木本性つるもので一般には栽培しないが、このつる黄斑入りは上品でよい。



カミヤツデ

Tetrapanax papyrifer 'Variegata' (ウコギ科)

台湾原産という大形の葉をもつ耐寒宿根草。オーストラリアのコレクター宅で発現した見事な覆輪葉。根茎で容易に殖えるのでこれを分けてもらったが、理屈どおり、残念なことに今だに覆輪葉は発生してこない。また大葉で有名なグンネラ(*Gunnera*)にも見事な完全覆輪葉がコスタリカの樹林下にあった。大株で掘り取り不可能なので見ただけであったが(写真失敗)、現在は国で保護されているとのこと。

ハマゴウ

Vitex rotundifolia (クマツヅラ科)

広く太平洋沿岸に生える落葉低木。柴道雅史氏発見。覆輪、刷毛込みなどの斑を出す灰色葉で、地味ではあるが味のある斑入り品。販売はない。耐寒性。

5) その他 トリカラー(五色葉)など

ベニバナトキワマンサク

Loropetalum chinense (マンサク科)

中国自生常緑樹。樹の里 鈴木氏は長年実生されていて実に不思議でおもしろい斑入り葉やカラーリーフ品種を多数得ている。現在は育成中のため販売は特にしていない。

金葉モクレン

Michelia foveolata (モクレン科)

中国雲南、湖南などに自生するオガタマノキの仲間。柴道昭氏導入。大きな葉の裏側が黄金色の光沢で見事。下から見ると明るくてよいものである。一年中目立つ。花は径約7cmで白色。高さは最高30m。



カエデ類

Acer (カエデ科、ムクロジ科)



矢野正善氏は奈良県宇陀市に将来世界最大のカエデ収集地を作りたいとの夢をもって、現在、収集・保存・維持・管理に日夜努力中の方。世界には1,200余種もあるという。樹木の葉色でこんなにカラフルな植物は、熱帯

のクロトン以外、ないのではないか。特に初夏の葉色の変化は見事。秋の紅葉はいうまでもない。完成すれば最高



のカラーリーフ園になろう。オランダではカエデ園をアセラタム *Aceratum* と称してボスコープの植木地帯にファン・フェルデレン親子が開園。規模は大きくはないが品種が多く、オランダ訪問の際には必ず寄った。矢野氏はさらに、すぐれた新品種を育成したい夢をもちカエデの交配、実生を重ねている。

まだまだ記したい魅力的な植物は尽きない。今後の新たな品種のますますの発現を期待して、紙数の関係で筆をおく。